

○梶田 考一 杉本 茂 坪郷 英彦 (東京家政学院大学)

□研究目的 現在、市販されている便器は抗菌仕様のもものが標準化している。メーカーは抗菌処理を施すことによって、消費者の「清潔指向」を満たすとともに、細菌の繁殖を抑制し「汚れ難く臭気を抑制する」ことを提示している。便器の「汚れ難さ」は消費者にとって「清掃の簡便化・頻度の減少」というメリットがあるが、「汚れ」に関する一般的な物理指標はなく、抗菌仕様の性能評価が曖昧である。そこで、本研究では非抗菌仕様と抗菌仕様の便器を学校と一般家庭に設置し、「汚れ」による性能評価を行った。

なお、「抗菌」の効果は「細菌量」で評価することが可能であるが、直接人体に触れることの少ない便座を除く便器本体は、「汚れの付着」を評価対象とする方が実利的である。

□研究方法 学校設置 (非抗菌:6 個 銀抗菌:7 個 フラッシュバルブ, 洗浄水は中水)、一般家庭設置 (非抗菌:6 個 銀抗菌:9 個 ロータンク) の便器について次の調査を行った。

調査 A: 便器の清掃を 1 ヶ月間行わず、使用回数及び目視による汚れの確認を行った。この調査では、便器に生じる「目に見える汚れ」を評価の対象とするが、「汚れ」に関する一般的な物理評価指標はないので、「1 調査員の目視による統一的な主観評価」によった。

調査 B: 汚れの度合いが清掃方法にどのように関与するかを明らかにするために、汚れを取り除くのに必要な方法 (清掃の方法を部位毎に 5 段階であらかじめ提示) を確認した。

□結果 「汚れ」の発生する時期は、使用頻度が 21 回/日以上、5 回/日以下の場合に、早くなる傾向にあり、抗菌処理の有無による顕著な差異はない。